

た。すなわち、井町美佐子氏（日本ブルカー）からは「LC/NMRのハードとソフト」と題し、LC/NMR装置及びソフトの概説、実際の測定操作の説明を交えたLC/NMR測定法、特に溶媒ピーク消去の説明がなされた。藤本孝子氏（日本電子）からは「JEOL LC-NMRシステム LC-NMR Dioの紹介」と題して同システムを例にとって装置の原理的な説明、ソフトの概説、プローブの選択、溶媒信号の検出・除去等の実用の際に極めて有用な情報について説明がなされた。串田克彦氏（バリアンテクノロジー・ジャパン）からは「LC/NMRに関わる問題点の解決法」なるテーマで実際にLC/NMRを操作する際に遭遇する種々の問題点に関し、長い経験に基づいた対処法についての説明がなされ、今後LC/NMRを導入して分析に利用しようとするユーザーにとっては有益な情報が提供された。

最後に、中村 洋委員長（東理大薬）からは「LC/NMRの今後の展望」というタイトルで本例会を締めくくられた。本技術の長所、短所、それを踏まえての改善点を含めた今後の展望等について示唆に富んだご講演をいただき、その後、これらの話題をさかんに多数の方の出席のもと懇親会が行われた。

以上の講演を独断で総括すると、LC/NMRの有用性については出席人数の多さが示すように誰もが異論をはさむ余地はないと思われるが、すべての演者が指摘したように、今後の課題としてはNMR側からは感度の向上と、LC側からはNMR測定に最適な分離条件を提供することが挙げられ、これらの課題を克服して真に有用な分析ツールをユーザーに提供するには、産学官連携の幅広い協力体制を作ることが急務であるとの印象を強く持った。この観点からの当研究懇談会の役割の重要性が再度認識された。

なお、本会場でのカタログ展示では関東化学㈱、日本電子㈱、日本フィルコン㈱の3社にご協力をいただき、この場をお借りして御礼を申し上げます。

〔産業技術総合研究所 野村 明〕

◆

第245回ガスクロマトグラフィ研究会

8月31日に恒例の見学会と講演会が行われた。今回は都民の生命、身体及び財産を災害から守ることを科学的に推進する目的で設立された東京消防科学研究所を訪問した。

当研究所は渋谷区幡ヶ谷にあり、見学会には定員30名のところ40名以上が参加され、最初に長谷川第一研究室室長による消防技術研究開発の現況と成果についての講演が行われた。研究開発（業務）領域では、消防活動の効率・安全化、都民ができる防災技術の開発、消防医学、災害心理、救急技術に関する研究、火災原因鑑定、危険物判定や防火力試験などの業務が行われ、これらの研究成果は消火活動/都民生活に生かされている。例えば、消火に使用する水を節約する技術として放水ノズルの形状を工夫し、消火水の微粉化を図り、従来の使用量の半分以下で消火を行うようになったこと、極限状態で消火活動をされる消防隊員の装備として熱反射し、耐熱性がありかつ発汗するので通気性がないといけない防火服の開発、阪神大震災では火事の原因の1/3が電気に由来していたことから、地震が起きたときに自動的に抜けるコンセントの開発など様々な研

究開発が成されている事例が挙げられた。講演後は3班に分かれて第2～4研究室を見学した。GC/MS、蛍光X線、X線回折などを用いて火災原因や危険物の鑑定、確認や検定を行う第2研究室、感震自動開放ドアの開発、多目的救出台車の開発、新型ノズル開発、蛍光ローブ開発や防火服の安全性・機能性向上を図る第3研究室を回り、また消防隊員の身体に関する研究を行っている第4研究室では、見学者は熱環境で高温暴露体験をした。非常に過酷な熱環境での消火活動の大変さは、さらに19kgの着装で行わなければならないので想像以上の体力、気力の消耗があり、消火活動の大変さを実感した。

ちょうど研究所を見学した翌日、9月1日防災の日の未明40名が焼死した新宿歌舞伎町の雑居ビル火災があった。朝のTVニュースから、前日見学したばかりのあの重たい防火服の消防隊員が懸命に消火にあたられている姿が目に入り込んできて、実戦を見せられたように驚いた。さらに驚愕したのは、その11日後の世界を震撼させた米同時多発テロ事件であったが、ますます複雑多様化する社会の中での火事、災害そのうえテロ災害からも、私達の生命・財産を命を賭して守る活動をされる消防隊/消防科学研究所の皆様にご感謝の意を表する思いであった。

〔東京都立衛生研究所 水石和子〕

◆

高分子分析研究懇談会第310回例会

標記例会が、10月15日に簡易保険会館「ゆうぼうと」において、約40名の参加者を得て開催された。最初の講演では、長年X線回折に携わってこられた柏野節夫氏（岡山大理）より「X線回折法とそれから得られる情報の特徴」と題する講演があった。単結晶X線回折を例にとり、X線回折の原理の特徴と利用にあたっての留意点、X線構造解析によってどのような情報が得られるかの詳細な解説を、研究例を交えて講演された。また、単結晶作製時の注意点や顕微鏡観察の大切さなど大変参考になった。

続いてワークショップ2件の報告があった。1件目は松田裕生氏（帝人）より「テレフタル酸系共重合ポリエステルにおけるロングレンジシーケンス」と題して、共重合体やエステル交換反応などを施したブレンド体として、繊維、フィルム、樹脂などの様々な工業製品に多用されている重縮合系ポリマーの溶液NMRによる長連鎖の構造解析に関する報告があった。2件目は内海晋也氏（住友化学工業）より「新規収束光顕微鏡を用いたPEインフレーションフィルムの形態解析」と題して、新規に開発された収束光顕微鏡（CBOM）の原理や、ポリエチレンインフレーションフィルムの透明性と表面形態との相関に関する報告があった。なお、今回以降このワークショップは、本懇談会会員が例会時に順番で定期的に行うことになった。

最後に、マテリアルライフ学会の会長を務められる大石不二夫氏（神奈川大理）より「高分子材料のLCAのためのリサイクル研究」と題する講演があった。地球環境保全のため、ライフサイクルアセスメント（LCA）が要請されているが、それを実現させるための基盤となるリサイクリングの研究例として、熱硬化性プラスチック（プリント基板等）、PET等の熱

可塑性プラスチック、加硫ゴムおよびFRP等に関して、実例を示しながら解説された。21世紀は環境保全が最大の課題と力説され、コストの問題はあるがリサイクルの必要性を再認識した講演であった。

各講演の後には活発な質疑応答が行われ、盛況のうちに第310回例会は終了した。

〔ライオン株式会社 田中孝祐〕

「分析化学」編集委員会だより

2001年度第3回「分析化学」編集委員会が9月13日(木)に開催された。定例事項として、第4回編集幹事会議事録の確認、及び発行された第50巻6号の確認を行うとともに、新投稿論文について担当委員を確認し、一部題名を検討の上修正した。また、第10号の掲載予定を確認した。さらに、投稿論文等の現状について事務局から報告があり、これを了承した。

次に報告事項として、「分析化学総説」・「博士論文要録」・「テクニカルレター」・「ホームページ」の現況について、それぞれ担当委員から報告があった。また、審査員名簿の更新について、早下理事(糠塚委員代理)より、名簿更新の取りまとめ案が「Anal. Sci.」の小委員会でも承認されたとの報告があった。

協議事項としては、以下のとおり行われた。①問題論文について：問題のあった投稿論文について審議した。②電子化・ネットワーク化について：上原小委員長より、NTTラーニングシステムズ(NTT-LS)が管理するJ-Stageの投稿支援システムについて、使い勝手及び利用に伴う負担を確認するために、小委員会で投稿支援システムに関する試行テストを行う予定であることが報告された。一方、事務局からは、NIIの電子図書館サービス利用に必要な契約をNIIと日本分析化学会で取り交わしたことで、本サービスを利用した「分析化学」誌のオンライン公開を10月から開始するために、既刊誌をNIIに送付したとの報告があった。③特集号について：「生体関連機能と分析化学」特集号について、近藤委員より、特集号の募集原稿が「ぶんせき」9月号に掲載されたとの報告があった。また、第50年会でも募集ビラの配布を行い、積極的に投稿を呼びかけることとした。④「分析化学」論文賞英訳について：最終案“The Best Paper Award in Bunseki Kagaku, 2001”に決定した。⑤投稿カードについて：水野委員より、Word版投稿カードをホームページ上から一般にダウンロードできるようにした旨報告があった。⑥その他：早下理事より、「分析化学」誌の編集・発刊に伴う予算の収支について調査した結果、「分析化学」誌自体の収支は黒字であり、財政面で学会に負担をかけていないことが報告された。しかし、他学会の和文誌が休刊となることに関連して、「分析化学」誌も投稿受理数の微減が続いており、さらに魅力ある論文誌作りに努力すべきであることが編集委員間で再確認された。例えば、論文賞受賞論文については編集委員会で英訳し、International Editionとして「Anal. Sci.」に掲載するなどの案が考えられるが、これについては著作権の問題等を含め、具体的な検討を進めることとした。長谷川委員長からは、論文を書くことの重要性を啓蒙する

という意味も含め、大学院生など若い研究者に投稿を呼びかけることも必要であるとの意見が出された。

近年、和文論文誌の種類、発行数がますます減少しているように思えます。もちろん、研究成果を英文でまとめ世界に向けて発信することは重要であり、一般に英語論文のほうが高い評価を受けることも事実です。しかし一方で、地域性が高くなかなか英文誌に投稿しにくい研究や、貴重なデータにもかかわらず英語が障壁となり発表できずに埋もれている研究等もあり、それらを活字にして公表するという和文誌にしかできない役割も存在していると思います。論文投稿を躊躇しているあなた、積極的に「分析化学」誌に皆様の貴重なデータを投稿してくださいませよう、編集委員一同心よりお待ちしております。

〔国立医薬品食品衛生研究所 花尻(木倉)瑠理〕

理事会だより

2001年度第4回理事会が9月14日(金)11時30分から17時30分まで、本会会議室で高木 誠会長の司会で行われた。通常は13時開始のところを11時30分に繰り上げられたのは、報告事項22件、承認事項19件、審議事項10件、報告事項3件と多くの案件について協議しなければならなかったためである。主な内容を関連事項ごとにまとめると、以下のとおりである。

(1) ICAS2001の澤田嗣郎組織委員長から終了の報告があった。登録者数980(参加国数39)、基調講演5、招待講演259、一般口頭発表257、ポスター発表378が行われ、成功裡に終了したとのお礼が述べられた。21世紀の幕開けに相応しい記念すべき国際会議であったと評価し、参加された会員はもとより、組織委員・実行委員の献身的な努力、尽力に敬意を表した。なお、同時に開催されたASIANALYSIS VIについて概略の報告があったが、詳細は次回の理事会で報告される。

(2) 「Anal. Sci.」誌では、国内外からの投稿が増えたので、編集委員を追加委嘱する提案がなされ、石原浩二、垣内 隆、立間 徹、星野 仁、山田正昭、渡会 仁の6氏に委嘱することが承認された。国際誌としての評価が年々高まっており、さらなる飛躍を期待したい。またインパクトファクターを高めるためにも、「Anal. Sci.」の掲載論文を引用文献として積極的に採用してほしい。

一方、和文誌においては、「日本化学会誌」が来年3月で休刊になる事情を踏まえ、「The Chemical Record」のような学協会連合の和文誌の刊行について、日本化学会から本会の考えを打診してきたが、“保留”と回答したことを了承した。「分析化学」誌は大学関係の研究者だけでなく、国内企業等の現場で働く技術者・研究者の有用な情報を発信できる貴重な和文学術誌として位置づけられる。しかし、昨今の投稿論文数の減少は危惧されるところであり、いかに幅広い読者層をとらえ、その期待に応えられる魅力ある和文学術誌作りができるかが当面の課題である。

(3) 谷口副会長から第50年会(熊本大学)の準備状況が報告された。今回は50周年記念大会にあたり、記念品の配布も決定されたことでもあり、ぜひ多数参加して会を盛り上げていた